人生うろうろ

清水義範

中公文庫

中公文庫

人生うろうろ

1995年 5月3日印刷
1995年 5月18日発行

著 者 清水義範

発行者 嶋中行雄

発行所 中央公論社
〒104 東京都中央区京橋2-8-7 振替 00120-4-34 TEL 03-3563-1431(販売部)

©1995 CHUOKORON-SHA,INC. / Yoshinori Shimizu

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 本州製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-202314-9 Printed in Japan

中公文庫

人生うろうろ

清水義範

中央公論社

目次

野間家先祖代々之墓 7
蛭子坂産婦人科 37
御社に惚れました 67
単身人生 95
狭いながらも 121
久仁子の結婚 151
天使の誘惑 179

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

シンドローム離婚　207
このままじゃいけない　235
ほとけさま　263
あとがき　290
解説　俵万智　293

人生うろうろ

野間家先祖代々之墓

「頭、痛いでしょう」
初老の警察官が意外に優しい口調でそう言った。
「ええ、少し」
と野間村明は返事をした。
「お茶……、よりも水のほうがいいかな。水あげましょう」
「どうも」
と頭を下げる。出されたコップの水を、一気に半分飲んだ。
「じゃあ、ちょっと話をきかせてもらいますよ。こんなことはなるべく早く終りにして、家へ帰りたいでしょう」
警官の名は笠松といった。五十五歳くらいだ。そして野間は四十九歳。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「住所を教えて下さい」
素直にそれを答えた。笠松は記録紙に書きこむ。
「お仕事は」
「サラリーマンです。神原(かんばら)物産の新宿支社に勤務」
「そうだそうで。一流の会社ですよねえ。で、役職は」
「総務部統計課の課長です。あの……」
「え」
「いやあの、私のことはもう、会社のほうへ伝わっているんでしょうか」
笠松は安心しろというように、小さく首を横に振った。
事務机を六つ、押しつけて大テーブルのようにして使っている。その角のひとつをはさんで、二人は灰色のビニールをはった事務椅子にすわっていた。だから正面から向き合っているのではない。
時々人の出入りはあるが、二人以外に落ちついて机に面して腰かけている人間はいなかった。午前九時半である。
「会社へは特に何も伝えていません。こちらから奥さんのほうへはまあ、話をしまし

たけど。だから奥さんが会社へ何か、適当に連絡するんじゃないですか」
「そうですか」
野間はそう言って頭を下げた。配慮に感謝する意を表したのである。
笠松は記録紙から顔をあげ、世間話のような口調で言った。
「しかしまあ、とんでもないことをしたもんですなあ」
取調べに当たるのがこういう穏やかな人で助かった、と思いながら野間は身を縮めた。
「えーと、大分酔っていたわけだけど、自分がしたことは覚えていますね。ちゃんとわかってますか」
「はい」
自分が何をしたのか、明瞭に承知していた。
「何をしたんです。言って下さい」
「お墓を……、倒したり、傷つけたりしました。多分あれは、家の近くの鈍頑寺(どんがんじ)のお墓だと思います」
「そういうことですわねえ。それも何と、十三基もの墓を次々にひっくり返して、最

後に大きな五輪塔を倒そうとしがみついているところを、警官に現行犯で捕まったわけです。何をしてるんだ、ってことで保護されたわけですね。ゆうべの一時半頃のことです」

「どうも……」

まだ宿酔(ふつかよい)は残っているが、正気を取り戻している野間としては、弱い声でそう言って身を縮めるしかないわけであった。

「十三基ともなると、ちょっとしたいたずらだったではすまされんわけです。もちろんお酒に酔っていたわけだけど、酒の上の狼藉(ろうぜき)ということですますには、派手すぎますし」

「いや、自分のしたことには責任を取ります。受けるべき処罰は受けますから」

「処罰というところまではできることなら話を持っていきたくないと思っとるんですけどね。本当のことを言えば、墓を荒らすというのは、普通の、器物破損とかの例とは該当する法律も違ってるんですよ。墓というものは、もう少し精神性のあるもので、よその家の庭の灯籠を倒したとかね、公共物であるポストを倒したという場合よりは、重大性のある事件だということになるんです」

「その通りだと思います」
野間は神妙な態度でそう言った。
「ですけど、場合によっては、話をあまり大きなものにしないでおこうと思ってます。社会的にも信用のある、一流会社のエリート・サラリーマンで、これまで法律にふれるようなこともせずに、真面目にやってこられた方だということははっきりしているわけですから。だからその、どうしてあんなことをしちゃったのかね、それを話してもらいたいわけですよ」
野間は机の上を見るともなく見つめて、言葉につまってしまう。
笠松はタバコをくわえて火をつけた。やりますか、と勧めてくれたのだが、やめましたので、と断った。
「酒を飲んで無茶する人間はよくいますけど、大抵は若い連中ですわねえ」
笠松は思い出し笑いをしながらそう言った。
「特に昔はひどかった。最近の若い者はおとなしくなったけど、昔はバンカラの気風が残っていたせいか、とんでもないのがいましたよ。たとえばね、道路標識を折って家へ持ち運んじゃったのがいました。あれって、鉄のパイプが、コンクリートで地面

に固定してあるわけですよ。それを、折ってねじって、引きちぎってしまってですね、家へ持って帰っちゃったんです。酔ってるからこそそんな怪力が出るんでしょうねえ、むちゃくちゃですよ」

野間は笑わなかった。自分も、それに似た無茶をしてしまったのだ。宿酔の作用による反省心の海につかって、重い気分でいるわけであった。

「そういうのと比べれば、野間さんは落ちついた分別も十分にある年齢なわけでしょう。なんでまたあんなことをしたんですか」

「墓が……」

かすれた声が野間の喉から出た。

「つまり、墓が気にいらなかったんです。墓に対して、腹が立ってしまって……」

2

「お墓が気にいらなかったんですか。どういうことです」

笠松は不思議そうに言った。

野間は髪をかきむしる。みじめな気分だった。

「ですから、墓のことでちょっと、いろいろありまして、むしゃくしゃしていたんだと思います。でも、それは私の個人的な問題で、他人に話すようなことじゃないわけです。言いわけなんかせず、自分のしたことに対する罰は受けます。弁償とか、罰金とかを、きちんと払って償います」

「それは、もっとあとできちんと考えましょう。とりあえずはね、ここで一応私にもなるほどとわかるように、事情を話して下さいよ。あの、別に取調べを受けているんだなんて、硬く考えることはないんです。ただ、警察としては、納得できる物事の理由を知っておきたいだけですから。だからその、知人に相談するような気持で話して下さいませんか。お墓のことでむしゃくしゃしていたというのは、どういうことです」

その時急に、話してしまいたい、という気持になった。誰かに話したかったのだ、本当は。

「えーと、墓を買わなきゃいけない、ということになったんです。いや、それで結局、もう墓地そのものは買ったんですけど」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com